**読書ノート　その19**

2018年7月21日　小林

ルース・ベネディクトの「日本は恥の文化」との指摘にたいして、複数の学者から「日本にも罪の文化がある」ことが反論としてあげられており（主に仏教からの影響）、これらの反論を整理しまとめる形で小論文を書こうと考えています。（仮題「日本における恥の文化と罪の文化」）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　

論文を書くにあたっては、関連知識として精神分析・心理学において罪悪感や罪の意識、恥の心理がどのように議論されているのかを押さえておきたいと思い、今回は北山修が提唱した精神分析における概念「見るなの禁止」を中心に報告します。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 北山修[[1]](#footnote-1)(2017.2)

参考文献

1. 北山修・山下達久編著「罪の日本語臨床」（創元社、2009年5月）。本書は論文集。「日本語臨床」とは、日本語の中に日本人の深層心理がかくされているとの考えから神話や昔話、語源などを精神分析学の面から研究するもの。
2. 北山修・橋本雅之「日本人の〈原罪〉」（講談社現代新書、2009年1月）。橋本は皇學館大教授、神話学。
3. 北山修「最後の授業」（みすず書房、2010年7月）。九大退官にあたっての講義録。

**「見るなの禁止」について**

* 北山いわく「私は最近、罪悪感というものに非常に関心を持っています。精神分析というのは、実は罪悪感の心理学と言い切ってもいいのではないかと思われるほどフロイトはたいへん長くこのテーマに取り組んで、終生これに苦しんでいたように思います」。このように、精神分析学では、なぜ罪悪感は発生するのかについて多くの議論がなされてきた。
* 現在、われわれは法律や社会ルールに反する行動をとったときに罪悪感を感じます（「いけないことをしてしまった」）。それでは、法律や社会ルールやムラの掟も明確に存在していなかった原始時代において、日本人はどのような場合に罪悪感を感じたのでしょうか？　言い換えると、もっともプリミティブな罪悪感とはどのような場合に感じるのでしょうか？
* 北山はこの問題にたいして、日本の神話や昔話を研究することから「見るなの禁止」という概念を提唱し、これによって日本人の深層心理における罪悪感について説明をした。
* 「見るなの禁止」とは、たとえば「イザナキ・イザナミ神話」や「鶴の恩返し」[[2]](#footnote-2)に出てくる女性の「見ないでください」との禁止をいう。その夫はこの禁止にもかかわらずのぞき見したため、女性の正体、すなわち腐乱死体や鶴であることを知ってしまう。正体をあばかれた女性はそれを恥じて夫のもとから去って行ってしまう。
* ここから北山は、ある人の善・悪や醜・美などの二面性をあばいてしまったときの「すまない」という感情が日本人の罪悪感の原始的な感情だと説明した。たとえば、夫のイザナキが愛する妻イザナミの腐乱死体という醜い姿をあばいてしまったときに感じた「すまない」という感情であり、「鶴の恩返し」では自分の羽を抜いて布を織っていた血みどろの鶴という正体をあばいてしまったときに感じた「すまない」という感情である。（ﾌﾛｲﾄ等は罪悪感について別の説明をしている。）
* 人は誰でも二面性を持っていて、マイナスの部分を隠しながら生きている存在ではないか。これは、「わたくし」の語源から言えるのではないか。「ワガタメニカクシ」（我爲隠）or「ワタカクシ」（曲隠・渡隠）が語源との説あり。なお、「曲」は曲者、曲事のように「悪い」や「違法」の意味あり、「渡隠」は「何かを隠して世を渡る」の意味。
* 日本人は、人のことを「何かを隠している存在」と認識しているのではないか。その隠しているモノを見てはいけないとの共通理解があり（つまり「見るなの禁止」）、その禁を犯して隠しているモノを見た場合、人は「すまない」という感情＝罪悪感を感じるのではないか。
* 北村いわく、イザナキ・イザナミ神話は本当にあった事ではないか。つまり、(1)イザナミの死因である出産死は古代においてはしばしば起きたこと、(2)イザナミが腐乱死体になったのは、殯(もがり)の風習から通常のこと。殯とは、死を確認するため一定期間遺体を放置しておくこと。実際、そこに「見るなの禁止」があったのではないか。
* イザナキはイザナミの腐乱死体を見たあと鼻孔を洗って腐臭を洗い流したが、これはケガレをミソギで消そうとした行為。ここに日本人の罪の意識があらわれている。罪はケガレであり、ケガレは「澄まない」モノ＝濁ったモノであり、これを「澄まそう」とするのがミソギ。だから、日本人が罪悪感を感じたときは「澄まない」との思いが心に生じ、「すみません」と謝罪する。

**岡野憲一朗「日本語における罪悪感の表現について」－「罪の日本語臨床」から**

* 国際医療福祉大学教授。この論文は、チョットした気づきを深掘りすると良い論文になるという見本。
* ルース・ベネディクトの「日本は恥の文化」との主張にたいし多くの批判があり、その中の柳田國男の「日本人ほど「罪」という言葉を口にする民族はほかにない」との反論は、筆者も賛同する。その理由は、日本人は「すみません」とよく言うが、この「すみません」は罪の意識を他者に向かって表現している言葉だから。これほど罪をたびたび意識する民族はほかにいない。
* 米英等の英語圏でほめられた場合、「Thank you」とほめ言葉をそのまま受けとるのが普通。しかし日本人がこれを実行しようとすると大変な勇気がいる。居心地が悪い、気恥ずかしさを感じる。
* 日本人がほめられた場合、普通の対応は「いえ、お恥ずかしいかぎりで」などと相手のほめ言葉を否定する。そうすると相手は「いえいえ、本当に良かったですよ」などとそれをさらに否定し、この繰り返しが永遠につづく。飲食代をどちらが払うかのやり取りや贈答品をもらったときのやり取りも、無限連鎖型コミュニケーション。「私が払う」「いや、オレだ」・・・、「つまらないモノですが」「ありがとうございます。なんてなんて素敵なんでしょう」「いえいえそれほどでも」・・・。
* これにたいして、米国人等は相手のほめ言葉をそのまま受け入れて、「Thank you」と返して、そこで会話は終わる。
* この日本人の無限連鎖型コミュニケーションは、患者が診察室から出て行くときにも見せる。診察が終わり患者は立ち上がり、身支度が終わり、ドアを開けて出て行くまでに三回はわかれの挨拶を言いお辞儀する。これにたいして、米国人等は立ち上がったときに一度わかれの挨拶を言いそれでおしまい（ただし、出て行くとき「ドアを開けておきますか・閉めておきますか？」と聞いてくるのが普通）。
* 日本人の謝罪は過剰さが特徴といえる。(1)頻繁に「すみません」を言う。(2)「すみません」の意味は「いくら謝ってもすまない」という意味であり、「申し訳ありません」も「言い訳・弁解のしようもない」との意味。つまり、日本人はしばしば罪悪感を強く感じているということ。これにたいして、米国人等の謝罪「I am sorry」は、聞くことが少なく、聞いたとしても淡泊に感じる。（欧米は罪の文化と言えるのか？）
* 罪悪感とは、「自分が他人より多くの快（より少ない苦痛）を体験する際に生じる感情」。
* この定義からすると、日本人がほめられた場合（たとえば、「すばらしい論文ですね」）、それをすなおに認めてしまうと、「自分が他人より多くの快を体験する」ことになるので、罪悪感を感じてしまう。それを回避するため、「いえ、つまらない雑文でお恥ずかしい」などとほめ言葉を否定することになる。
* 我思うに、ムラ社会での人間関係を考えた場合、自分だけいい思いをすることは、隣人からねたみをかい、ムラの和をみだすことになるので、日本人は「自分が他人より多くの快（より少ない苦痛）を体験する」ことに強い罪悪感を感じるのではないだろうか。

以上

1. 1946年生まれ、京都府立医大卒、精神科医（東京・南青山で開業）、九大名誉教授、元日本精神分析学会会長、元フォーク・クルセダーズのメンバー、日本レコード大賞作詞賞を「戦争を知らない子供たち」で受賞。著書・論文多数。元メンバーの加藤和彦（62）、端田宜彦（72）はすでに他界。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 「トヨタマヒメ神話」や「うぐいすの里」「蛇女房」「雪女」「浦島太郎」も同類系のストーリー。 [↑](#footnote-ref-2)